



Title	所有を表す stative have とその変異形について : イギリス英語における現状と歴史的変遷
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 149-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

所有を表す *stative have* とその変異形について

——イギリス英語における現状と歴史的変遷——

大 津 智 彦

1. 導入

イギリス英語において、本動詞または助動詞としての *have* を用いて所有の意味を表すには次の三つの選択肢がある (Quirk et al (1985 : 131))。

- (1) a. We *haven't* any butter.
- b. We *don't have* any butter.
- c. We *haven't got* any butter.

(1a) は本動詞の *have* に否定辞 *not* を融合させたもので、*do-support* を未だ採り入れていない伝統的な形式である。(1b) では *have* は同じく本動詞であるが他の一般動詞と同様に *do-support* を採用している。(1c) では *have* は助動詞であり、*have got* は元々は *get* の過去分詞形 *got* を伴う現在完了形である。ここで問題となるのは、(1a)、(1b) 間における *do-support* の有無、及び (1c) に見られるような本動詞 *have* に代わる *have got* の使用が現実の語法ではどう現れているかである。Quirk et al (1985 : 132) によると、(1a) は形式ばったイギリス英語に見られ、(1b) はアメリカ英語に特徴的だが最近ではイギリス英語でも普通であるという。そして (1c) は形式ばらないイギリス英語とされる。Trudgill et al. (2002 : 6-7) はさらに詳しく観察を行い、(1a)、(1b) の差について、イギリス南部の若い世代では (1b) のように *do-support* の使用する方

向に変化してきているという。そして、その変化を相当新しいこととし、BBC news bulletins における最初の使用を 1972 年の 2 月であるとする Strevens (1972: 48) の見解を引用している。一方、アイルランド、スコットランド、イングランド北部では (1b) のように *do-support* を使用するケースはまだ珍しいと述べている。また、(1c) に関する Visser (1973: 2202-5)、Denison (1998: 172) の歴史に関する記述が興味深い。両者の記述を総合すると、イギリスでは *have got* は 18 世紀中頃には所有の意味で使われており、現代になって本動詞 *have* に代わって大きく頻度を伸ばしている。しかし、疑問文・否定文では *do-support* を用いた本動詞 *have* が盛り返しつつあるという。

以上から (1a-c) のイギリス英語における現実の使用状況に関し浮んでくる絵は次のようなものであろう。(1a) は一部方言で勢力を保ちつつも大きく勢いを落とし、(1b) は最近になって（特に若い世代を中心に）一般に用いられるようになってきている。そして、(1c) は形式ばらない場面を中心に活発に使われている。しかし、これでわれわれは所有を表す stative *have (got)* の実際の使用状況について客観的に把握できたとは言えない。というのは、“大きく勢いを落とし”、“一般に用いられる”、“活発に使われて” という理解ではあまりにも輪郭があいまいで、本当のところがよく分からないからである。

このような場合、コーパスを用いた調査を行い、実態を具体的な数値で示すのが最も分かりやすい。その点、Biber et al. (1999: 161-2, 215-6)) はコーパスに基づき、*have (got)* の否定形、疑問形について *do-support* の有無をアメリカ英語・イギリス英語の会話、フィクションなどに分けてグラフで客観的に示し大変参考になる。しかし、この現象は英米の違いのみに帰されるものではない。上で見たように、年齢、方言、形式ばった場面か否かなど、他の言語外的要因による違いにも関係している可能性があるかもしれない。また、*have* に対する *do-support* や *have got* の出現は比較的最近（後期近代英語期）に起こったものである（Denison (1998: 172, 202)）、現在進行形（または未完了）の言語変化を観察するという意味で過去数十年から 100 数十年の変化をたどるのも興味深い。このような理由で、(1a-c) の三者選択について

所有を表す *stative have* とその変異形について——イギリス英語における現状と歴史的変遷——
は未だ研究の余地が大いにあるといえる。

2. 調査方法

上に挙げた要因を考慮に入れた研究を行うにはそれにふさわしいコーパスが必要となる。まず、書き言葉か話し言葉かの選択をしなければならないが、*have got* が話し言葉を中心に現れるのが既にわかっていること、また年齢、方言などの要因を加味しなければいけないことを考えるとそういった情報を含む話し言葉のコーパスが適切である。今回はイギリス英語を対象とするが、話し言葉のコーパスのなかでも、現代イギリス英語のコーパスとしては、新しさ、規模の大きさ、社会言語学的なパラメータの多さ、入手のしやすさから考えて British National Corpus (BNC) の spoken component が最もふさわしいと考えた。BNC の spoken component は 1991 年から 1993 年の間に録音された資料からなる約 1000 万語の話し言葉のコーパスである。この話し言葉のコーパスは大きく二分される。demographic part は男女さまざまな年齢、階級からなる 100 数十人の調査員がテープレコーダーを隠し持ち、自らが参加した日常会話を数日間に渡って録音したものである。一方、context-governed part は教育、ビジネス、公共、レジャーの場で発せられた話し言葉（講演、会議、インタビューなど）からなり、demographic part を補完する形になっている。

歴史的調査には 1800-1960 年に出版されたイギリス文学から論文末尾に挙げた 27 作品をコーパスとして選んだ。このうち、デジタル化されたテキストについては The Project Gutenberg (<http://www.gutenberg.net>) から取り寄せ、コンコードランサーを使って検索し、デジタル化されていないテキストは実際にそれを読むことによって用例を探した。文学作品には、「語り」の部分(narrative passages)と「会話」の部分があるが、今回の調査では話し言葉を対象としていることから「会話」の部分のみから抽出した。小説の「会話」部分は必ずしも実際の口語を完全に反映していないという批判があるが、史的研究においては過去の話し言葉を映し出す数少ない資料のひとつとして貴重である。¹

次に対象構文であるが、*do*-support の有無がひとつの焦点となるので否定

文が疑問文でなければならない。Biber et al. (1999: 216) によると否定文も疑問文も *do-support* に関して同じ傾向を示すということから、ここではより多くの用例の抽出が期待できる疑問文を選んだ。なお、文の主語は *you* に限定し、否定疑問文は考慮から外した。²

- (2) a. Have you any butter?
- b. Do you have any butter?
- c. Have you got any butter?

BNC の検索については付属の専用アプリケーション *Sara* を用い、先行研究 (Trudgill et al (2002: 4-6) 及び Denison (1998: 203)) において (2a-c) の交替現象に最も大きな影響を及ぼす要因であると挙げられている年齢と方言をパラメーターとしてデータを集めた。1800-1960 年のイギリス文学作品については会話の部分から収集した用例を年代別に振り分け、*real time* の変化を探ることにした。

3. 調査結果

3.1 年齢

まず現代イギリス英語の話し言葉における年齢別の分布からみる。表1は6つの年齢層からなるが、BNC では各年齢層ごとの語数が統一されていないので、用例の絶対数による比較は意味がない。よって、各年齢層において3つの構文がそれぞれ占める比率に注目されたい。³

表 1 BNC の spoken component における年齢別の分布

	0-14		15-24		25-34	
	用例数	比率%	用例数	比率%	用例数	比率%
(a) <i>Have you... ?</i>	0	0	1	1	6	3
(b) <i>Do you have... ?</i>	9	9	6	4	22	12
(c) <i>Have you got... ?</i>	93	91	139	95	153	85
合計	102	100	146	100	181	100
	35-44		45-59		60+	
	用例数	比率%	用例数	比率%	用例数	比率%
(a) <i>Have you... ?</i>	10	5	14	6	8	6
(b) <i>Do you have... ?</i>	15	8	17	7	6	5
(c) <i>Have you got... ?</i>	161	87	204	87	108	89
合計	186	100	235	100	122	100

まず全体を通して言えるのは、*Have you got... ?* の比率がすべての年齢層で9割前後を占めることである。現代イギリス英語の話し言葉では所有の有無を問う際は年齢を問わず *Have you got... ?* を用いることが圧倒的に優勢であることを確認しておきたい。⁴ 60歳以上の高年齢層にも *Have you got... ?* が浸透しているのはこの構文が1900年代の比較的早い時期から広がっていたためかどうなのか、歴史的データを分析する際に検証したい。

次に *do-support* を使った *Do you have... ?* を見る。上に述べたように、この構文は Quirk et al. (1985: 132) によると、最近ではイギリス英語において普通であり、また、Trudgill et al. (2002: 6-7) によると、最近、イギリス南部の若い世代に用いられる方向に変化してきているということであった。表1の結果から、こういった観察は次のような見方をすべきであることがわかる。つまり、*Do you have... ?* が増加してきていると言ってもそれは *Have you... ?* との相対的な関係においてであり、*Have you got... ?* も含めた全体の中での *Do you have... ?* の比率は全年齢層で10%前後と頻度は相当低い。全体の中で見た場合、*Have you got... ?* の勢力に押されており、若い世代ほど *Do you have... ?*

が台頭してきている傾向は特に認められないのである。

では、*Do you have... ?* と *Have you... ?* の相対的な関係はどうか。そこには興味深い現象を発見することができる。60+ から若い世代へと順番に *Do you have... ?* と *Have you... ?* の合計数に *Do you have... ?* の数が占める割合を並べていくと、43% → 55% → 60% → 79% → 86% → 100% とゆっくりとした増加傾向にあるのがわかるのである。⁵ これは確かに若い世代ほど *Do you have... ?* を使う比率が高いことを示すものである。しかし、年齢差を *apparent time* の違いと見ると、この数字の変化は *stative have* における *do-support* の使用は決して若い世代の専売特許ではなく、*do-support* が徐々に時間の流れとともに広がって行く様子を表しているようにも解釈できる。

因みに、*Do you have... ?* や *Have you got... ?* に押されて圧倒的に少数となってしまった *Have you... ?* であるが、残存している *Have you... ?* の用例は必ずしも *have* の目的語として *idea* や *clue* などを持ついわゆる決り文句ではなく、むしろ多様な目的語を持っている。例文は次のとおり。

- | | |
|---|-------------|
| (3) Have you a professional set of these? | (KD6(4458)) |
| (4) Have you vegetables? | (KCV(4345)) |
| (5) Have you any proof of purchase? | (FUT(500)) |

3.2 方言

BNC の *spoken component* における話者の方言は *accent* つまり発音の訛りによって分類される。ロンドン、スコットランド、アイルランドの訛りに分けてデータを整理したのが表2である。方言ごとの総語数が異なるので、表1の場合と同じく各構文が占める比率に注目されたい。

まず言えるのは、どの方言においても *Have you got... ?* が圧倒的に優勢で、最も少ないスコットランドでも7割を占める。Trudgill et al. (2002: 6-7) はスコットランド英語やアイルランド英語は保守的で、*Have you... ?* を未だに保持している旨の報告を行っている。この報告を読んだだけでは、スコットラ

所有を表す *stative have* とその変異形について——イギリス英語における現状と歴史的変遷——

ンド英語やアイルランド英語では所有の有無を問う場合 *Have you... ?* が主流である印象を受けるが、表2の結果はそういった地方でさえ *Have you got... ?* の勢力がずば抜けて大きいことを示すものとして意味があると言える。

次に *Have you... ?* についてであるが、ロンドン方言では全く用例がなかったのに対し、スコットランド方言、アイルランド方言ではそれぞれ2例と3例が確認された。⁶ これはロンドンなどでは *Have you... ?* が衰退しているのに対し、スコットランド、アイルランドでは生き残っている傾向を示しており、その意味で上記の Trudgill et al. (2002: 6-7) の報告と軌を一にしている。しかし、スコットランド方言、アイルランド方言では全体として抽出できた用例数が少ないので確定的なことは言えないが、*Have you... ?* の比率が Trudgill et al. (2002: 6-7) の報告から予測する数値よりもかなり小さい。逆に同じ報告でまねたとされる *Do you have... ?* の比率の方が高いのである。これは *do-support* への移行に関して、果たして Trudgill et al. (2002: 6-7) の言うように一口にスコットランド英語、アイルランド英語のほうが標準イギリス英語よりも保守的であると言えるかどうか疑問を投げかけるものである。両方言話者のアメリカとの交流の深さを考えると、ロンドンを中心とする話者と同様にアメリカ英語の影響を受けていると十分に考えられるのである。

表2 BNC の spoken component における方言別の分布

	London		Scotland		Ireland	
	用例数	比率%	用例数	比率%	用例数	比率%
(a) <i>Have you... ?</i>	0	0	2	6	3	9
(b) <i>Do you have... ?</i>	8	6	8	24	4	13
(c) <i>Have you got... ?</i>	121	94	23	70	25	78
合計	129	100	33	100	32	100

3.3 歴史的推移

次に1800年以降の歴史的推移を考察する。表3では調査対象となった約160年間を3つの年代に区分し結果を示した。1900年代について、1920年前後、1950年前後と分けているのは、前者に関しては電子テキストで入手できたものがこの年代に限られたこと、後者に関しては実際読んで用例を集めるために選んだテキストがこの時代に集中したこと、という言語外的要因による。

表3においてまず着目しておきたいのは、1800年代と1920年前後で (a)-(c) の比率にほとんど差がない点である。⁷ 導入でみたとおり *have got* の組み合わせは18世紀には受け入れられていたとされるが、1800年から1920年までの間、*Have you got... ?* は特に勢力を増すことなく少数派として安定した使用が続いていたものとみられる。一方、その間、圧倒的多数を占めていたのは言うまでもなく *Have you... ?* である。

そのような状況が一変するのが1950年前後である。*Have you... ?* と *Have you got... ?* の勢力が逆転し、前者が少数派、後者が多数派へと変化を見せている。データの収集には1920年前後、1950年前後とも文学作品の会話部分を使っておりコーパスの均質性の問題であるとは考えにくい。今回の調査結果は、イギリス英語における *Have you got... ?* の台頭が1920年から1950年の30年間という比較的短い間に起こったことを示唆するものである。これは、3.1の年齢をパラメータとしたセクションで、60歳以上の高齢層にも *Have you got... ?* が浸透していることと一致する。

この構文は口語を中心に用いられるものなので、保守的な書き言葉に比べ、一旦広まりだした変化が記録に反映されやすいとは言えるだろう。しかし、100数十年保たれていた均衡がなぜこの時期に破られたのかは現時点では不明である。1920年から1950年の間に焦点を置いた調査が今後の課題となるだろう。

因みに、*Do you have... ?* は1950前後に至るまでの間ほとんど観察されなかった。この点、上に紹介したとおり、BBC news bulletins における *do-support* の最初の使用を1972年であるとする Strevens (1972: 48) の見解と矛盾しない。

表3 1800-1960年の文学作品（会話部分）における年代別分布

	1800年代		1920年前後		1950年前後	
	用例数	比率%	用例数	比率%	用例数	比率%
(a) <i>Have you... ?</i>	61	82	45	82	5	28
(b) <i>Do you have... ?</i>	1	1	0	0	1	6
(c) <i>Have you got... ?</i>	13	17	10	18	12	66
合計	75	100	55	100	18	100

4. まとめ

以上、イギリス英語における、所有を表す *stative have* の3つの変異形の分布について、現時点での状況及び歴史的推移をコーパスに基づき調査した。BNCを用いた現時点での状況に関する調査では、年齢、方言というパラメータを採用して先行研究にはない社会言語学的な考察を行うことができた。歴史的推移に関しては、現代イギリス英語に特徴的に認められる *Have you got...?* の優勢の起源を1920年から1950年にある可能性を指摘した。

注

- 1 例えばヘルシンキ大学などが編纂を進めている歴史的コーパス ARCHER (A Representative Corpus of Historical English Registers) では *Speech-Based register* として *Fictional conversation* が採り入れられている。
- 2 主語を *you* に限定したのは、調査の効率性もちろんあるが、話し言葉を対象とすることを考えると、*you* を主語に持つのがこの構文の典型例であるからである。
- 3 厳密に言うと、各年齢層ごとに語数が異なるので、統計学上の正確性も異なる。
- 4 ここで *formality* を考慮に入れたいところだが、BNCでは話者の社会階級や最終学歴に関する情報はあがるが、残念ながら *formality* に関する情報はない。しかし、*Have you got...?* が *informal* な表現であると頭から決めてしまうのは適切ではないことを次の例(BNCには含まれない)を挙げて指摘しておきたい。

“What have you got, sir?” (P. Lovesey, *The Vault*, p. 1)

これは警察署にやってきた市民に警官が声を掛ける場面である。sir という表現からわかるようにどちらかと言えばかしこまった場面であるが、*Have you got...?* が用いられている。

- 5 60+ を例にとって計算式を示すと次の通り。 $6 \div (8+6) \approx 0.428$
 6 *Have you...?* 合計5例のうち、25-34歳が2例、50歳台が2例、70歳台が1例と広い年齢層にまたがっている。また、ここでも次の例からわかるようにこれら5例は決り文句ではない。

Have you any expressions that you, you thinks's very expressive? (GYS(193))

Have you any outside help? (KDU(232))

Have you a standard charge? (F7C(1354))

- 7 実は、*Have you got...?*に関して、1800年代では13例中7例が *David Copperfield*、1920年代では10例中5例までが *Of Human Bondage* の用例で占められている。それぞれの作品を検索対象から外して集計し直すと次の表の結果となった。*Have you...?* の比率が増え、*Have you got...?* が減ったが、1800年代と1920年代でほぼ同一の傾向を示すのは変わらない。

	1800年代		1920年前後	
	用例数	比率%	用例数	比率%
(a) <i>Have you... ?</i>	58	89	40	89
(b) <i>Do you have... ?</i>	1	2	0	0
(c) <i>Have you got... ?</i>	6	9	5	11
合計	65	100	45	100

参考文献

- Biber, D, S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999)
Longman Grammar of Spoken and Written English. Pearson Education, Harlow.
 Denison, D. (1998) "Syntax," in S. Romaine, ed., *The Cambridge History of the English Language*, Vol. IV, 92-329, Cambridge University Press, Cambridge.
 Strevens, P. (1972) *British and American English*, London, Macmillan.
 Trudgill, P., T. Nevalainen, & I. Wischer (2002) "Dynamic have in North American and British Isles English," *English Language and Linguistics* 6.1 : 1-15.
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the*

所有を表す *stative have* とその変異形について——イギリス英語における現状と歴史的変遷 ——

English Language, Longman, Harlow.

Visser, F. Th. (1966). *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II, E. J. Brill, Leiden.

使用したコーパス

・現代イギリス英語

British National Corpus, World Edition (2000) Oxford : The Humanities Computing Unit of Oxford University.

・イギリス文学作品

出版年	著者	作品名
1813	Jane Austin	<i>Pride and Prejudice</i>
1847	Charlotte Brontë	<i>Jane Eyre</i>
1847	Emily Brontë	<i>Wuthering Heights</i>
1848	Elizabeth Gaskell	<i>Mary Barton</i>
1848	William Thackeray	<i>Vanity Fair</i>
1849-50	Charles Dickens	<i>David Copperfield</i>
1860	Wilkie Collins	<i>The Woman in White</i>
1871-72	George Eliot	<i>Middlemarch</i>
1872	Samuel Butler	<i>Erewhon</i>
1874	Thomas Hardy	<i>Far from the Madding Crowd</i>
1883	Arthur Conan Doyle	<i>A Study in Scarlet</i>
1883	Robert Louis Stevenson	<i>Treasure Island</i>
1886	Robert Louis Stevenson	<i>The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde</i>
1891	Thomas Hardy	<i>Tess</i>
1892	Arthur Conan Doyle	<i>Adventures of Sherlock Holmes</i>
1905	Arthur Conan Doyle	<i>Return of Sherlock Holmes</i>
1915	Somerset Maugham	<i>Of Human Bondage</i>
1919	Virginia Woolf	<i>Night and Day</i>
1920	David H. Laurence	<i>Women in Love</i>
1920	Agatha Christie	<i>The Mysterious Affair at Styles</i>
1922	Agatha Christie	<i>Secret Adversary</i>

大 津 智 彦

以上21作品 The Project Gutenberg (<http://www.gutenberg.net>) から取り寄せたデジタルテキスト。

1945	Roald Dahl	<i>Over to You</i>
1945	Evelyn Waugh	<i>Brideshead Revisited</i>
1954	Arthur C. Clarke	<i>Childhood's End</i>
1954	Kingsley Amis	<i>Lucky Jim</i>
1957	John Braine	<i>Room at the Top</i>
1957	John Osborne	<i>Look Back in Anger</i>

以上6作品非デジタル(印刷)テキスト。使用した版は以下のとおり。

- Amis, K. (1954) *Lucky Jim*. London : Penguin Books.
Braine, J. (1957) *Room at the Top*. London : Arrow Books.
Clarke, A. C. (1954) *Childhood's End*. London : Pan Books.
Dahl, R. (1945) *Over to You*. London : Penguin Books.
Osborne, J. (1957) *Look Back in Anger*. London : Faber and Faber.
Waugh, E. (1945) *Brideshead Revisited*. London : Penguin Books.